

岑參の西域行 — 辺塞の涙 —

森 博 行

序文

南末の陸游（一一二五—一二〇九）は、『老學庵筆記』（卷三）において次のように記している。

岑參の安西の幕府に在りしとき、詩（「鉄関の西館に宿す」『岑嘉州詩』卷三）に云えらく、那ぞ知らん 故園の月、也た鉄関の西に到らんとは、と。韋応物も郡（の知事）作りし時、亦た詩（「樓中月夜」『韋江州集』卷七）有りて云えらく、寧ぞ知らん 故園の月、今夕 茲の樓に在らんとは、と。語意は悉く同じくして、豪邁・閑澹の趣は、居然として自ら異なれり。

韋応物（七三六—？）の詩に対して白居易（七七二—八四六）が「元九に与うる書」（『白氏長慶集』卷二十八）のなかで、「五言詩は又た高雅にして閑澹、自ら一家の体を成す」と書いていること、また岑參（七一五—七七〇）に対して陸游が「夜 岑嘉州詩集を読む」（『劔南詩稿』卷四）と題する詩のなかで、「公の詩は信に豪偉、筆力は李杜を追う」と詠じていることから考えて、『老學庵筆記』における「豪邁」が岑參を指していることは明らかである。この「豪

邁」は岑参の文学に対する評語であるが、「豪邁」という言葉から私が連想するのは、あたりを憚らず邁進する勇ましい武人の姿。「桓」温は少くして豪邁の風氣有り」（『世説新語』卷上之上「言語」第二）。桓温（三二二—三七二）が晋王朝篡奪の機会を伺っていた野心家であったことはよく知られている。

ところで岑参のいわゆる辺塞詩を読んでいると、涙という字がかなり頻繁に現れることに気づく。実際、岑参が彼の詩の中においてどの程度の涙を流しているのか、『岑参歌詩索引』（森野繁夫校閲 新免恵子編 朋友書店 一九八七年）によって調べてみると23例あるが（ただし、「武威にて劉単判官の安西の行營に赴くを送り、便ち高開府に呈す」（卷一九一頁）の「紅淚 金の燭盤」は、ロウソクの比喩なので除外した）、この23例のうち、後述するとおり西域あるいはその往復の途上で作られたのは11例あって、実に半数近くをこの期間の作品が占めている計算になるのである。彼が西域を体験した期間はおよそ五年間。それに対して彼の一生は五十五年。わずか十一分の一の期間に一生かかって流す涙の半分近くの量を流しているのである。ちなみに『校注』の「前言」（七頁）によれば岑参の詩の総数は四〇三首であるから、彼が一生の間に流した涙の割合は、約3%である。西域における多量の涙、これは正常とは思われない。陸游から「豪邁」と評された、涙と一見無縁のように思える岑参の辺塞詩に涙が多いのはどうしてだろうか。岑参の辺塞詩についてはこれまで幾多の優れた論文が発表されている。このうえ更に何をつけ加えるのかという気持ちもあるが、

(一)、私の知る限りでは特に涙を取りあげて岑参の辺塞詩を論じたものがないこと

(二)、岑参の辺塞詩に現われた涙が、必ずしも明らかでない彼の辺塞詩制作時期を推定するひとつの手がかりを与えてくれるのではないかと思われること

このふたつの理由から、涙を通じてみた岑参の辺塞詩を探ってみることも意味があるのではないかと判断して、ここに卑見を述べることにした。なお、岑参の詩を解釈するに当たっては、陳鉄民 侯忠義 校注『岑参集校注』（中國

古典文學叢書 上海古籍出版社 一九八一年八月。以下、『校注』と略称)、および劉開揚 箋註『岑参詩集編年箋註』(巴蜀書社 一九九五年十一月。以下、『箋註』と略称)の二書を特に参照した。ただし、この小論に引用する場合、原則として『校注』から引用し、また岑参の生年、それに伴って卒年については『校注』と『箋註』に一年ずつのずれがあるが(『校注』の方が早い)、今回は岑参の経歴もふくめて特に断らないかぎり『校注』に従った。

第一節 岑参の涙

岑参は西域で二度にわたって生活を体験した。第一回目は、天宝八載(七四九 35歳)冬(?)から天宝十載(七五一 37歳)初秋まで。第二回目は、天宝十三載(七五四 40歳)夏秋の間から至徳二載(七五七 43歳)まで。目的地はそれぞれ安西(新疆ウイグル自治区庫車)と北庭(新疆ウイグル自治区烏魯木齊市の北西約一八〇キロメートル)。ここには都護府といって西域を治める役所があった。彼の身分は、第一回目のときは節度使の掌書記、第二回目のときは節度判官。ともに要するに節度使の属官であり、節度使はもともと辺塞の軍政・行政を司る長官であって、都護府の長官が兼ねることが多かった。第一回目のときの長官は高仙芝(?—七五五)、第二回目のときは封常清(?—七五五)という人物である。蛇足ながらこのふたりは安祿山(?—七五七)との戦いに敗れ、ともに責任を問われて斬首された(『舊唐書』卷一百四および『唐書』卷一百三十五「本伝」)。

問題の西域における涙であるが、『校注』によって数えれば、岑参は第一回目のときには、「初めて隴山を過ぎる途中、宇文判官に呈す」(七三頁)から「臨洮の龍興寺の玄上人の院にて、同じく青木香叢を詠す」(九七頁)まで32首、第二回目のときには、「北庭に赴かんとして隴を度り家を思う」(一四一頁)から「酒泉太守の席上にて酔後の作」(一八八頁)まで45首、それぞれ詩を作っているが、これらの作品群をやや詳細に読んでいくと、同じく西域であっても

第一回目（特に往路）と第二回目とにおいて、涙について違いが大きくいつてふたつあることに気づく。量的な違いと質的な違いである。

まずこの節において量的な違いについて述べることにする。岑参の西域における11首の詩の涙のうち第一回目の作品は8首、それに対して第二回目ときは3首である。この数字を西域および往復途中において作られた作品に占める割合で表わしてみると、第一回目は25%（32分の8）、このうち往路および安西滞在中の作（以下、往路と称す）が約19%（32分の6）、還路が約6%（32分の2）、第二回目は約7%（45分の3）となる。第二回目るときにくらべて、第一回目るとき、特に往路のときに比率が高いことがわかる。これらの詩句をここに引用しておくのと次のとおりである。

第一回目

1、憑添兩行淚 憑りて兩行の涙を添え

寄向故園流 寄せて故園に向かつて流さん

「西のかた渭州を過ぎ、渭水を見て秦川を思う」（巻二 七五頁）

2、故園東望路漫漫 故園 東望すれば 路は漫漫たり

雙袖龍鍾淚不乾 双袖 龍鍾として 涙は乾かず

「京に入る使いに逢う」（巻二 七七頁）

3、雙雙愁淚沾馬毛 双双の愁涙 馬毛を沾し

颯颯胡風进入面 颯颯たる胡風 人面に进る

「銀山磧の西館」（巻二 七九頁）

4、漢月垂鄉淚 漢月に郷涙を垂れ

胡沙費馬蹄 胡沙に馬蹄を費す

「磧西の頭にて李判官の京に入るを送る」(巻二 八三頁)

5、曉笛引郷涙 曉笛は郷涙を引き

秋冰鳴馬蹄 秋水は馬蹄に鳴る

「早に焉耆を発し、終南の別業を懐う」(巻二 八五頁)

6、苜蓿烽邊逢立春 苜蓿烽辺 立春に逢い

胡蘆河上淚沾巾 胡蘆河上 涙 巾を沾す

「苜蓿烽に題し家人に寄す」(巻二 八六頁)

(以上、往路)

7、塞花飄客淚 塞花 客淚 飄い

邊柳挂郷愁 辺柳 郷愁 挂かる

「武威の春暮、宇文判官の西に使いして還り、已に晋昌に至ると聞く」(巻二 八九頁)

8、客淚題書落 客淚 書を題して落ち

郷愁對酒寛 郷愁 酒に對して寛くす

「韋侍御の先に京に帰るを送る 寛字を得たり」(巻二 九六頁)

(以上、還路)

第二回目

1、送君九月交河北 君を送る 九月 交河の北

雪裏題詩淚滿衣 雪裏に詩を題せば 涙 衣に滿つ

「崔子の京に還るを送る」(巻三一一七二頁)

2、相送涙沾衣 相い送らんとして 涙 衣を沾す

天涯獨未歸 天涯 独り未だ歸らず

「四鎮薛侍御の東に帰るを送る」(巻二一一七五頁)

3、胡歌一曲斷人腸 胡歌 一曲 人の腸を断ち

座上相看淚如雨 座上 相い看れば 涙 雨の如し

「酒泉太守の席上に酔いて後の作」(巻三一一八八頁)

以上が西域で歌った詩に現れた涙である。

第一回目と第二回目における涙の量的な違いの原因は、簡単に言えば経験と未経験との違いによるものと思われる。つまり岑参が第一回目の往路において何度も涙を流したのは、未知の世界を前にして不安と恐怖のために深い悲しみに陥り、正常なバランスを失っていたからである。「涙なる者は、肝の液なり。五臟六腑の津液、皆な上りて目に滲む。凡そ悲哀笑咳のとき、則ち中に火激すれば、心繫急しくして臟腑皆な揺らぐ。揺らげば則ち宗脈感じて液道開き、津は上りて溢る。故に涕泣出づ」(李時珍『本草綱目』卷五十二「眼淚」【集解】)。

ここに第一回目するとき、長安を出てから作られた作品のうち、『校注』・『箋註』(一六二頁)ともに時間的に三番目に早いものとする作品を紹介しよう。

「西のかた渭州を過ぎ、渭水を見て秦川を思う」(第一回目の涙の1)

渭水東流去 渭水 東に流れ去り

何時到雍州 何れの時にか雍州に到らん

憑添兩行淚 憑りて兩行の涙を添え

寄向故園流 寄せて故園に向かって流さん

詩題の「渭州」は現在の甘肅省隴西県のあたり、長安から大体、西北西に向かって約四百二十キロメートルのところにある。「秦川」、「雍州」、「故園」(故郷)、要するにすべて長安を指す。このとき彼は不安な前途と故郷の長安を思って涙しているのである。第一回目の涙が1・2・4・5・7・8番目の詩に見られるとおり、たいてい故郷とセツトになっていることに注意すべきで、特に4・5の「郷涙」という語は典型的なものである。「試みに征徒とともに望むれば、郷涙 尽く衣を霑す」。これは、南斉の謝朓(四六四—四九九)の「休沐せんとして重ねて還る道中」(『文選』卷二十七)と題する詩であり、五臣注(呂延濟)は、「郷涙は、望郷の涙」と解釈した。「憑りて両行の涙を添え、寄せて故園に向かって流さん」、未知の世界を前にして故郷を思って涙している岑参の不安の大きさ、異国体験をもつ人ならば想像がつくというものである。

第二節 送別の涙

前節において述べた経験と未経験との違いによる涙の量的な差異は、質的な変化をも引き起こしていると思われる。この点についてここでは特に親しい人との送別の際における涙に焦点をしばって、第一回目の往路のときと第二回目のときとを比較して検討してみることにする。順序が逆になるが、まず第二回目のおりの送別の詩。

「崔子の京に還るを送る」(第二回目の涙の1)

匹馬西從天外歸 匹馬 西のかた天外從り帰る

揚鞭只共鳥爭飛 鞭を揚げ 只ら鳥と共に争い飛ぶ

送君九月交河北 君を送る 九月 交河の北

雪裏題詩淚滿衣 雪裏に詩を題せば 涙 衣に滿つ

第二句の「鞭を揚げ」は馬を早く走らせるといふことであるが、都に帰る崔子（詳細は不明。なお「子」は男子に對する尊称であり、岑參は詩題によくこの語を使用する）の喜びに滿ちた様子、それは同時に作者の悲しみをも表わしている。しかし、この詩における涙にとって大事なものは、異文化ショックによる精神的不安の涙でなくて、都に帰つていく崔子を羨望しての涙であるということである。「此れ婦人を欣羨し、自ら淹滞するを傷むなり」（唐汝詢『唐詩解』卷二十七。『箋註』三四七頁所引）。これに対して第一回目の往路のとき、同じく都に帰る同僚を見送るさいの涙は次のとおりである。

「磧西の頭にて李判官の京に入るを送る」（第一回目の涙の4）

一身從遠使 一身 遠使に従い

萬里向安西 万里 安西に向かう

漢月垂鄉淚 漢月に郷涙を垂れ

胡沙費馬蹄 胡沙に馬蹄を費す

尋河愁地盡 河を尋ねて 地の尽きるかと愁い

過磧覺天低 磧を過ぎて 天の低きを覺ゆ

送子軍中歌 子を送りて 軍中に歌い

家書醉裏題 家書 醉裏に題す

この詩は『校注』によれば、初めて安西都護府に到着したときの作。岑參とは逆に安西での仕事を終えて長安に帰つていく李判官を送別するに当たり、岑參は「漢月」（中国本土を照らす月）を眺めながら故郷を思つて「郷涙を垂れ」ているわけだが、このときの涙はただ単に李判官を羨ましく思つて流しているのではない。『校注』（八四頁）は次の

ように説明した。「両句（「漢月」および「胡沙」ふたつの句）は、作者の望郷と旅愁を書いた」。岑参はこのとき、「河を尋ねて 地の尽きるかと愁い、磧を過ぎて 天の低きを覚ゆ」、これまで見たこともない天地の果てかと思わせる異様な光景に接し、極度に怯えて涙しているのである。第五句の「河」は黄河であり、その源は中国の極西にある崑崙山にあると考えられていた。また第六句の「天の低きを覚ゆ」とは、「磧を過ぐ」と題する詩（八三頁）の「四望すれば 雲天 直下に低る」と類似の表現で、「沙漠の茫として無辺際、四望すれば天と相連なる光景」（『校注』八三頁）を表現した。

本来、送別の詩というものは、周の宣王（在位前八二七-前七八二）のとき、大臣の尹吉甫が謝の国に封ぜられた申伯を送別するにあたって作った『詩経』「大雅・蕩之什・崧高」篇に見られるとおり、送別される人に対するはなむけのために作られるものであり、送別される人物について歌われるものである。

申伯番番 申伯 番番たり

既入于謝 既に謝に入り

徒御嘽嘽 徒御 嘽嘽たり

周邦咸喜 周邦 咸な喜び

戎有良翰 戎に良翰有り

不顯申伯 顯らかならずや申伯

王之元舅 王の元舅にして

文武是憲 文武 是れ憲あり

「崧高」篇の第七章である。「毛伝」によれば「番番」は勇武のさま、「嘽嘽」は喜樂の様子。また「鄭箋」は第四・第五句を解釈して、「徧邦の内 皆な喜んで曰く、女や善君有るなり」。申伯をほめたたたえたものであることは言うま

でもない。ところが岑参の場合、第二回目的「崔子の京に還るを送る」詩には、送られる崔子の行動が

匹馬 西のかた天外従り帰る

鞭を揚げ 只ら鳥と共に争い飛ぶ

と、きちんと表現されているのに対して、第一回目的「磧西の頭にて李判官の都に入るを送る」詩では、送られる李判官の行動はまったく表現されることはなく、表現されているものは、第一句の「一身」から始まって、最後の句の「醉裏に題す」まで、すべて作者岑参自身の行動と感慨である。『校注』は第七句の「子を送りて 軍中に歌い」に対して「送別の意を点出した」と評したが、「軍中に歌」うのはやはり作者である。第一回目的のとき不安な状態におかれていた岑参の心には、送別の詩でありながら送別の言葉を贈る余裕もなかったのである。

ここで西域で作られた詩に限定せず、広く岑参の送別の詩をながめてみよう。彼の送別詩は、詩題によって計算すれば一三〇首余りある。これらの詩を通読するとき、彼の送別の詩にはあるパターンがあることがわかる。それは送別される人に己れの故郷や家族への手紙を託すとき、送られる人の行動あるいは感情をも同時に歌うということである。一例を挙げよう。岑参の時間的に一番早い送別詩「灤水の東店にて唐子の嵩陽に帰るを送る」(巻一 一三三頁)と題する詩である。

野店臨官路 野店 官路に臨み

重城壓御堤 重城 御堤を圧す

山開灤水北 山は開く 灤水の北

雨過杜陵西 雨は過ぐ 杜陵の西

歸夢秋能作 歸夢 秋に能く作り

鄉書醉懶題 鄉書 酔いて題すに懶し

橋廻忽不見 橋廻かにして 忽ち見えざるも

征馬尚聞嘶 征馬 尚お嘶くを聞く

この詩を作ったとき岑参の家は嵩陽にあった。したがって「郷書」は岑参が唐子に託した故郷への手紙であるが、最後の一聯

橋廻かにして 忽ち見えざるも

征馬 尚お嘶くを聞く

は見送られる唐子の旅立ちの描写であり、「征馬 尚お嘶く」というのは、岑参との別離の悲しみに耐えかねて、唐子の乗る馬さえも嘶いているというのである。

青山横北郭 青山 北郭に横たわり

白水遶東城 白水 東城を遶る

此地一爲別 此地 一たび別れを為せば

孤蓬萬里征 孤蓬 万里に征くがごとし

浮雲遊子意 浮雲 遊子の意

落日故人心 落日 故人の心

揮手自茲去 手を揮りて茲こ自り去らんとすれば

蕭蕭班馬鳴 蕭蕭として 班馬鳴く

これは、李白の「友人を送る」(『李太白全集』卷十八)と題する詩であるが、最後の一聯「手を揮りて茲こ自り去らんとすれば、蕭蕭として 班馬鳴く」に対して、王琦は「主客(李白と友人)の馬、將に道を分かたんとして蕭蕭として(ヒヒーン、ヒヒーン)長く鳴き、亦た離群の感有るが若し。畜(馬)すら猶お此の如し、人 何を以てか

堪えん」と説明した。岑参の「征馬 尚お嘶く」の句も同じと考えてよい。

このように「瀋水の東店にて唐子の嵩陽に帰るを送る」詩においては、はなむけとして見送られる唐子の旅立ちの様子がきちんと表現されている。ところが第一回目の往路の作である「磧西の頭にて李判官の都に入るを送る」詩にかぎって、「家書」はうたわれるが、見送られる李判官のありさまについてはうたわれていない。

これを要するに、第一回目の涙と第二回目の涙とは意味が違うのである。もっとも、『箋註』（『年譜』一四頁及び本文二九五頁）は「磧西の頭にて李判官の都に入るを送る」詩の李判官を李栖筠なる人物とし、李嘉言の『岑詩繫年』の説にしたがって、この詩を第二回目の時（天宝十三載）の作とするが、李判官が李栖筠という確かな証拠がないこと（岑参の詩には「使院中、新たに柏樹子を栽え、李十五栖筠に呈す」と題する詩（巻二 一六二頁）のように、詩題に排行と共に名を明示した詩がある）、また詩中に「万里 安西に向かう」という一句があること、及び上述した私の立論により、第一回目の往路のとき（天宝八載）の作と考える方がよいと思う。ただ、『校注』は初めて安西都護府に到着したときの作としたけれども、正確な時期はわからない。ここで参考までに第一回目の還路のりに作られた送別の詩「韋侍御の先に京に帰るを送る」（第一回目の涙の8）を紹介しておこう。

聞欲朝龍闕 聞く 龍闕に朝せんと欲すと

應須扞豸冠 応に須らく豸冠を扞うべし

風霜隨馬去 風霜 馬に隨いて去り

炎暑爲君寒 炎暑 君が為に寒からん

客淚題書落 客淚 書を題して落ち

鄉愁對酒寬 鄉愁 酒に對して寬くす

先憑報親友 先に憑りて親友に報ぜよ

後月到長安 後月 長安に到らんと

第二句の「豸冠」は正式には獬豸冠といい、侍御（史）のかぶる冠である。詩題の韋侍御は、おそらく新たに侍御として中央に召還されたのであろう。「聞欲」の両句は、韋侍御の京に進みし後、官職即ち將に升遷せんとするを祝す（張輝 選注『岑参辺塞詩選』三七頁 人民文学出版社 一九八一年・北京）。だから「応に須らく豸冠を払うべし」、冠のほこりを払うがよい、と表現した。もっとも大きな問題は第三・第四句の

風霜 馬に隨いて去り

炎暑 君が為に寒からん

である。この二句は明らかに送別される韋侍御について述べたものである。「侍御の京に帰るや、峻厲の氣を持って行き、侍御の霜威は炎熱の曷天をも寒からしむ」（『校注』九六頁）。御史は「風霜の任」と称せられた（『通典』卷二四「御史臺」。侍御史が御史臺に属する官僚であることはいままでもない。岑参は第五句において己れに対して「客涙 書を題して落ち」と表現しているけれども、「後月 長安に到らん」、やがて来月になれば自分も長安にもどることができる岑参は、ふっと安堵の心を取りもどしたのである。

なお、辺塞にいたときの送別の詩に涙が現れる作品にもうひとつ『四鎮薛侍御の東に帰るを送る』（第二回目の涙の2）と題する詩がある。

相送涙沾衣 相い送らんとして 涙 衣を沾す

天涯獨未歸 天涯 独り未だ帰らず

將軍初得罪 將軍 初めて罪を得

門客復何依 門客 復た何にか依らん

夢去胡山闊 夢に去らんとするも 胡山は闊く

書停隴雁稀 書は停まりて 隴雁は稀れなり

園林幸接近 園林 幸いに接近すれば

一爲到柴扉 一たび為に柴扉に到れ

この作品の製作時期に関して、『校注』(一七五頁)・『箋註』(三五二頁)はともに、李嘉言『岑詩繫年』の天宝十載(七五二)説、つまり第一回目よりの作という説に対して、天宝十五載(七五〇)説、つまり第二回目よりの作という説を提出した。この詩の第三句の「將軍」を高仙芝とするか、それとも封常清とするかによって意見がわかれるのである。私は最後の一聯に「園林 幸いに接近すれば、一たび為に柴扉に到れ」というふうには、「柴扉」(故郷の我が家)への言伝が、薛侍御の行動「到れ」という表現でうたわれていることから判断して、第二回目の作品ではないかと考える。

ところで岑参が第一回目の西域体験において激しいショックを受けていたと私が判定する材料は涙だけではない。「笑い」と「怯え」。次に涙を離れて別の角度から岑参の辺塞体験をながめてみることにする。

第三節 岑参の笑いと怯え

生理的にいって悲しみや不安の涙と対照的なものに歓喜による笑いがある。

剖竹向西蜀 竹を剖いて 西蜀に向かえば

岷峨眇天涯 岷峨 天涯に眇たり

空深北阙戀 空しく北阙の恋を深くし

豈憚南路賒 豈に南路の賒きを憚らんや

前日登七盤	前日 七盤に登り
曠然見三巴	曠然として三巴を見たり
漢水出岷家	漢水 岷家より出で
梁山控褒斜	梁山 褒斜を控う
棧道籠迅湍	棧道 迅湍を籠い
行人貫層崖	行人 層崖を貫く
巖傾劣通馬	巖傾いて 馬を通ずるに劣なく
石窄難容車	石窄くして 車を容るるに難し
深林怯魑魅	深林に魑魅に怯え
洞穴防龍蛇	洞穴に龍蛇を防ぐ
水種新插秧	水種 新に秧を挿し
山田正燒畬	山田 正に畬を焼く
夜猿嘯山雨	夜猿 山雨に嘯き
曙鳥鳴江花	曙鳥 江花に鳴く
過午方始飯	午を過ぎて 方に始めて飯するも
經時旋及瓜	時を経れば 旋ち瓜に及ばん
數公各遊宦	數公 各おの遊宦し
千里皆辭家	千里 皆な家を辞す
言笑忘羈旅	言笑して羈旅を忘れ

還如在京華 還って京華に在るが如し

これは岑参が大暦元年(七六六)、五十二歳、杜鴻漸(七〇九―七六九)にしたがって長安から蜀に赴く道中に作った『鮮于庶子と梓(梁?)州自り、成都少尹と褒城自り、同行して利州に至る道中の作』(巻四 三三四頁)と題する詩である。最後の二句

言笑して羈旅を忘れ

還って京華に在るが如し

は「羈旅」の身の上であっても、同行の友人との「言笑」にあたかも「京華」(都の長安)にいるかのように思われて楽しいというのである。「君子は楽しみて、然る後に笑う」。これは、唐玄度『九經字樣』「竹部・笑」の注に引く楊承慶『字統注』の文である。

岑参の西域における詩には、「卻って笑う 霍嫖姚の、区々として徒らに爾か為るを」(「北庭の西郊にて封大夫の降を受けて軍を回すを候いて献上す」巻二 一四九頁)などのような嘲笑という意味の笑いを除外すれば、笑という言葉を使った例は2例ある。この2という数量は、涙の11という数量と比べても、また絶対値としても極めて少ないということにまず注意しておかなければならない。次に引用する作品は、第一回目の還路のときの『臨洮の客舎にて祁四と留別す』(巻一 九七頁)と題する詩であり、『校注』・『箋註』ともに第一回目、天宝十載(七五一)六月、三年の任期を終えて故郷に帰る途中、臨洮に立ち寄ったおりの作とする。詩題の祁四なる人物は、画家の祁岳(樂)といわれる(聞一多『岑嘉州繫年考證』『聞一多全集』3所収二二八頁)。

無事向邊外 辺外に向いて事無けれども

至今仍不歸 今に至りても仍お帰らず

三年絶郷信 三年 郷信絶たれ

六月未春衣 六月 未だ春衣ならず

客舍洩水聒 客舍 洩水聒しく

孤城胡雁飛 孤城 胡雁飛ぶ

心知別君後 心を知る 君と別れし後

開口笑應稀 口を開き 笑うこと応に稀なるべきを

問題は最後の一聯

心を知る 君と別れし後

口を開き 笑うこと応に稀なるべきを

である。西域におけるこれ以前の岑參の詩に笑という言葉はまったくなくない。ところがこの詩には「稀なる」と述べられてはいるものの、ともかく「口を開き」で「笑う」と表現されているのである。この詩は『校注』によれば第一回目の西域行において時間的に最後から二番目の作品、臨洮から故郷の長安まではおおよそ五百キロメートルである。この笑いは故郷を目の前にして、岑參の心にも落ち着きと安堵が戻ってきたことを示すものであるに違いない。この詩は季夏六月に作られ、岑參は初秋七月には長安に到着している。

次に紹介する作品は『涼州の館中にて諸判官と夜集す』（巻二 一四四頁）と題する詩である。涼州は今の甘肅省武威県。『校注』・『箋註』（二九一頁）ともに第二回目、天宝十三載（七五四）、北庭に赴くときの作品とする。

灣灣月出挂城頭 灣灣として月出でて 城頭に挂かる

城頭月出照涼州 城頭に月出でて 涼州を照らす

涼州七里十萬家 涼州 七里 十萬家

胡人半解彈琵琶 胡人 半ば解く琵琶を弾く

琵琶一曲腸堪斷 琵琶の一曲 腸 断つに堪えたり

風蕭蕭兮夜漫漫 風は蕭蕭として 夜は漫漫たり

河西幕中多故人 河西の幕中 故人多し

故人別來三五春 故人 別來 三五の春

花門樓前見秋草 花門樓前 秋草を見る

豈能貧賤相看老 豈に能く貧賤にして 老を相い看んや

一生大笑能幾時 一生 大いに笑うは 能く幾時ぞ

斗酒相逢須醉倒 斗酒に相逢わば 須らく酔い倒るべし

やはり問題は最後の一聯の前半の句「一生 大いに笑うは 能く幾時ぞ」である。「一生」を「一年」に作る文献もあるが、「一生の方がいい」。この一句は『莊子』(第二十九)「盜跖」篇の次の文にもとづいている。「人、上寿は百歳、中寿は八十、下寿は六十、病瘦死喪憂患を除けば、其の中 口を開いて笑う者、一月の中、四五日に過ぎざるのみ」。岑參の右の笑いが心からのものではないとしても、第二回目の西域行においては長安を出て余り遠くないところで(先程の臨洮から涼州まではおおよそ北西に向かって四百キロメートル)、彼は既に笑っているのである。『校注』の配列にしたがえば、この詩は時間的に五番目の作品である。その後、西域における作品に笑いは出てこないが、第二回目ときには初めから西域の生活に対して余裕をもっていたと考えていいであろう。もはや異文化に対して激しい驚きや衝撃は感じなくなっていたのである。

怯えという語は、『玉篇』(巻第八)「心部」に「懼なり、畏なり」とあり、恐懼に心が畏縮しているさまである。

笑いが心の余裕を示すものであるのに対して、怯えという言葉はショックによる涙とともに、極度の不安状態に陥っている心理状態を如実に示すものである。この怯えという語は岑參の詩には3例あるが、西域における第一回目の往

路の作品に見えて、第二回目の作品には見えない。次に示す作品は『鉄関の西館に宿す』（巻二 八一頁）と題する詩である。「鉄関」は鉄門関のことで、『新唐書』（巻四十三下）、「地理志七下」に、「焉耆自西のかた五十里、鉄門関を過ぐ」とある。現在の新疆ウイグル自治区の焉耆と庫爾勒の間にある。このあたりはかなりの難所であり（『箋註』所引の郭魯柏『西域考古記要』参照 一八二頁）、安西都護府に到着するまでには、まだ相当の道のりを歩まねばならなかった。

馬汗踏成泥 馬汗 踏んで泥と成り

朝馳幾萬蹄 朝に馳す 幾万蹄

雪中行地角 雪中 地角を行き

火處宿天倪 火処 天倪に宿る

塞迴心常怯 塞は廻かにして 心は常に怯え

鄉遙夢亦迷 郷は遙かにして 夢も亦た迷う

那知故園月 那ぞ知らん 故園の月

也到鐵関西 也た鉄関の西に到らんとは

この詩の第五句に「心は常に怯え」と表現されているとおり、岑参にとっても「怯」という語は、心の不安を表わす言葉である。面白いのは先程引用した『鮮于庶子と梓（梁？）州自り、成都少尹と褒城自り、同行して利州に至る道中の作』詩の中で、次のように歌われていることである。

深林怯魍魅 深林に魍魅に怯え

洞穴防龍蛇 洞穴に龍蛇を防ぐ

この句にはある種のたわむれの気味があるように感じられるが、右の一句から演繹すれば岑参にとってまだ体験し

ていない西域は、魑魅魍魎の潜む恐ろしい世界にも等しいものであった。第二回目的作品にこのようなニュアンスをもつ「怯」字が使われていないことを思えば、彼のこのときの恐怖の深さ、不安の深さが推し測れるであろう。岑参自身が次のように詠じている。

知君慣度祁連城 知る 君 祁連城を度るに慣れば

豈能愁見輪臺月 豈に能く愁いて輪台の月を見んや

これは第一回目の還路のときの『李副使の碛西の官軍に赴くを送る』（巻二 九五頁）と題する詩である。李副使のこととして歌われているが、「慣れ」（経験）というものがどれほど心強いものであるか、逆に言えば不慣れ（未經験）ということがどれほど不安なことであるか、岑参自身体験的に承知していたのである。『校注』は「前言」（三頁）において次のように言った。

詩人の第一回目の辺塞体験は、辺境の荒涼とした風景や苦しい生活、そのうえ辺塞においても長安の場合と同様に「寂寞として意を得ず」（△△安西の館中にて長安を思う▽▽）のためにあまり意気があがらず、己れの苦しみや郷愁を述べた作品を多く書いたものであった。第二回目の時の状況は違っている。先ず、詩人は既に辺塞生活の試練を受けていたということである。（中略）だから第二回目の辺境においては、彼の気持ちは、比較的明かしく、意気軒昂であった」（詩人首次出塞、由于不習慣邊地的荒涼景象與艱苦生活、加上感到在塞外也和長安一樣「寂寞不得意」（△△安西館中思長安▽▽）、所以情緒不十分高昂、曾寫過較多表現自己的苦悶和思鄉情緒的作品吧）第二次出塞時情况有所不同。首先、詩人已經歷過邊塞生活的磨煉。（中略）因此這次出塞、詩人的情緒比較開朗和昂揚）

第四節 岑参と辺塞

岑參は西域に二度いった。なぜ二度もいったのだろうか。鈴木修次氏によれば、「西域へのある種のがれ」があった（『岑參論』『唐代詩人論 上巻』四〇一頁 鳳出版社 昭和四十八年）。しかし、あこがれだけが彼に二度も西域行を決意させたのではない。岑參の曾祖・岑文本は唐の太宗李世民（在位六二七—六四九）のときに、また伯祖の岑長倩は高宗李治（在位六五〇—六八三）のときに、更に伯父の岑羲は睿宗李旦（在位六八四—七一〇）のときに、それぞれ宰相にまでなった人物であるが、岑長倩と岑羲は誅殺された。岑羲の死は岑參の生まれる二年前のことである（聞一多著「岑嘉州繫年考証」『全集3』一〇四頁）。岑參にも官界における出世という個人的な野望と、お家再興という一族の期待があったであろう。「まだ見ぬ西城への好奇心のほか、その血統のなかに三人の宰相を持つ比較的すぐれた家系の圧力がそうさせたのかも知れなかった」。これは上尾龍介氏の見解である（「岑參の詩と西域」『漢文教室 71』十八頁上段）。岑參が西域で「旗あげたいと願ったのは、彼と同時代人にお手本がいたからである。それは他ならない封常清である。岑參は第二回目よりのときの長官であった封常清に対して、「北庭の西郊にて封大夫の降を受けて軍を回すを候いて献上す」と題する詩（卷二 一四九頁）を作り、この中で

如公未四十 公の如きは 未だ四十にならざるに

富貴能及時 富貴 能く時に及ぶ

直上排青雲 直ちに上りて 青雲を排し

傍看疾若飛 傍らより看れば 疾きこと飛ぶが若し

前年斬樓蘭 前年 樓蘭を斬り

去歲平月支 去歲 月支を平らぐ

天子日殊寵 天子 日び寵を殊にし

朝廷方見推 朝廷 方に推さる

何幸一書生 何ぞ幸いなる一書生

忽蒙國土知 忽ち國土の知を蒙れり

側身佐戎幕 身を側して戎幕に佐たり

斂衽事邊陲 衽を斂めて辺陲を事とす

自逐定遠侯 自ら定遠侯を逐い

亦著短後衣 亦た短後の衣を著る

近來能走馬 近來 能く馬を走らす

不弱并州兒 并州の兒より弱からず

と詠じた。「定遠侯」つまり一代書屋から身を従軍の兵士に転じて出世した後漢の班超(三二一—一〇二)は封常清を指し、「短後の衣」は前が長く後ろが短い騎乗に便利な衣服、これを着て再び「定遠公を逐」うのは岑參である。もし西域で成功すれば、將來、大臣になることさえ夢ではなかった。

だが果たして岑參にとって西域での生活は、首尾よいものであったのだろうか。

雁塞通鹽澤 雁塞 塩沢に通じ

龍堆接醋溝 龍堆 醋溝に接す

孤城天北畔 孤城 天北の畔

絕域海西頭 絶域 海西の頭

秋雪春仍下 秋雪 春にも仍お下り

朝風夜不休 朝風 夜にも休まず

可知年四十 知る可し 年四十

猶自未封侯 猶お自ら未だ侯に封ぜられざるを

これは、第二回目、天宝十四載(七五五)、四十一歳のときに作られた「北庭の作」(巻一 一五五頁)と題する詩である。「知る可し 年四十、猶お自ら未だ侯に封ぜられざるを」は、『論語』(第九)「子罕」篇の「四十五にして聞こゆること無くんば、斯れ亦た畏るるに足らざるのみ」を意識して、一向にうだつのあがらないことを嘆いたのである。彼の西域行は、けっして成功したとはいえないであろう。そして面白いのは次に引用する「日没 賀延磧の作」(巻一 一四五頁)と題する詩である。

沙上見日出 沙上に日の出づるを見る

沙上見日没 沙上に日の没するを見る

悔向萬里來 悔ゆらくは万里に向かいて来たりしこと

功名是何物 功名は是れ何物ぞ

詩題の「賀延磧」は、三藏法師・玄奘(六〇二—六六四)の西域旅行を記した慧立の『大慈恩寺三藏法師傳』(巻一「大藏經」(第五卷)「史傳部二」)の一節に、「此より北のかた五十余里、瓠蘆河有り。下は広く上は狭し。洄波甚だ急なり、深くして渡る可からず。上には玉門関を置き、路必ず此に由る。即ち西の境の襟喉なり。関の外の西北に又五烽有り。候望する者之に居り、各々相去ること百里なり、中に水草無し。五烽の外は即ち莫賀延磧なり。伊吾(新疆ウイグル自治区哈密市)の国境なり。」とある「莫賀延磧」を指す。この詩は『校注』によれば、第二回目的天宝十三載(七五四)、北庭に赴くときの作、『箋註』(一二二頁)によれば、第一回目的天宝八載(七四九)、安西に赴くときの作など見解が違うが、『箋註』の指摘のとおり、第一回目、初めて安西に赴くのと看做されると私は考える。岑参はこれまで見たこともない西域の異様な光景、すなわち延々と無限に続くかと思われる砂漠、その上に音もなく

無気味に現れては沈んで行く太陽に初めて接してショックを受け、目的地の安西に到着しないうちに早くも後悔し始めているのである。「悔ゆらくは万里に向かいて来たりしこと」といい、「功名は是れ何物ぞ」という表現は、このよ
うな心理状態を述べた言葉と考えるべきである。もっとも、これはそのときの一時の感情が言わしめた言葉であるこ
とは、岑参が再度、西域行を敢行していることから明らかである（『箋註』一七三頁）。しかし、もし岑参の二度、お
よそ五年間にわたる西域体験を象徴的に示す言葉を挙げるとするならば、

悔ゆらくは万里に向かいて来たりしこと

功名は是れ何物ぞ

の一聯こそもっともふさわしいと私は考える。『岑参辺塞詩選』（九六頁）がこの詩を第二回目の至徳元載（七五六）の
冬末、長安に帰るときの作とするのは、まったく理由がないわけではないのである。

結語

私はこの拙論を陸游の『老學庵筆記』から始めた。最後までやはり陸游の作品を取りあげて結びとする。陸游は「岑
嘉州詩集に跋す」（『渭南文集』巻二十六）において

予れ少き時自り、絶だ岑嘉州の詩を好む。往きて山中に在り、酔いて帰り、胡牀に倚りて睡る毎に、輒ち児曹を
して之れを誦せしめ、酒の醒むる、或は睡熟するに至りて乃ち已む。嘗に以為えらく太白（李白の字）・子美

（杜甫の字）の後、一人のみ、と。

と、岑参を李白と杜甫に続く第三人目の詩人と高く評価していたが、陸游は乾道九年（一一七三）、四十九歳、嘉州の
知事代理をしていたとき、拙論の序文に引用した「夜 岑嘉州詩集を読む」詩を作り、次のように歌った。

漢嘉山水邦

漢嘉は山水の邦にして

岑公昔所寓

岑公 昔 寓せし所なり

公詩信豪偉

公の詩は信に豪偉にして

筆力追李杜

筆力は李杜を追う

常想從軍時

常に想う 從軍の時

氣無玉關路

氣は玉関の路を無みするを

至今蠹簡傳

今に至りて 蠹簡伝わり

多昔橫梁賦

多くは 昔 梁を横たえて賦せしなり

零落財百篇

零落して財に百篇にすぎざるも

崔嵬多傑句

崔嵬として傑句多し

工夫刮造花

工夫は造花を刮り

音節配韶護

音節は韶と護に配す

我後四百年

我れ後るること四百年

清夢奉巾屨

清夢に巾屨を奉ず

晚途有奇事

晚途 奇事有り

隨牒得補處

牒に隨い 補する處を得たり

羣胡自魚肉

群胡 自ら魚肉し

明主方北顧

明主 方に北顧す

誦公天山篇

公の天山篇を誦し

流涕思一遇 流涕して 一遇せんことを思う

最後の一聯の「天山篇」は、直接には岑参の二回目の西域における作品「天山雪歌、蕭治の京に帰るを送る」(巻二 一六八・一六九頁)と題する詩を指すが、広く「岑参の安西・北庭に在る時に作る所の詩」(銭仲聯校注『劍南詩稿 第一冊』巻四 三三四頁 上海古籍出版社 一九八五年)と考えてよい。よく知られているとおり、陸游の時代には中国の北半分は異民族・金の国に占領されていた。岑参は西域の安西や北庭に行くことができたけれども、陸游当時の中国においては、西域行は国家を挙げて軍事行動をおこさないかぎり、まったく不可能なことであった。右の詩の最後の一句「流涕して 一遇せんことを思う」は、「岑参のように従軍して遠征し、敵を攻撃するという偶然の機会にめぐり合いたい」(游国恩 李易 選注『陸游詩選』二五頁 人民文学出版社 一九八六年・北京)という意味であり、陸游は岑参の西域で作られた多くの作品を読み(陸游の自注に「公の詩 西辺に従戎せし時に作る所多し」とある)、岑参のように宿敵と交戦するという「一遇を思」って「流涕」したものである。「群胡 自ら魚肉し」ている状態、すなわち「群胡」つまり金国の内部で互いに「魚肉」つまり殺戮しあっているすきを突けば、それは不可能なことではないという戦略的確信が陸游にはあったのである。

岑参の「豪偉」な一面につよく心をひかれ、彼に対して「常に想う 従軍の時、気は玉関の路を無みするを」と詠じた陸游が、岑参の西域における作品に多量の涙が流されていたことに気づいていたかどうかはわからない。ただはっきりしていることは、時代や人を問わず涙というものが極めて人間的な感情の発露であるということである。肖文苑氏は李白や杜甫が詩に流した涙に対して、「詩人の魂のふるえる旋律」(「詩人的眼淚」『唐詩瑣語』所収 四九頁 天津人民出版社 一九八〇年)と称された。「詩人の魂のふるえる旋律」、これは岑参や陸游が流した涙についても同断である。